

リスクコミュニケーションの進め方（案）について

～ 第 1 回から第 3 回の懇談会で出た意見等から ～

参加者

- 市民・事業者・行政
- ファシリテーター（中立的立場から議論を整理する司会の役割をする方）
- インタプリター（中立的立場で理解しにくい情報をわかりやすく説明できる方）

場所

- 工場
（可能なら、地域及び工場で行う）

プログラム

- 工場見学を盛り込む。
- お互いにどんなことを考えているかを確認する場を設ける。
- 身近な化学物質のリスクについて理解するための機会を設ける。

工場からの説明

- 化学物質に関する話題だけでなく、悪臭など市民の関心が高い内容を盛り込む。
- 説明する際の留意点
 - ・ 化学物質はその物質がどんな物質であるか（用途など）を説明する。
 - ・ 専門用語はわかりやすく言い換える。
 - ・ 市民が無用の不安を持っている可能性があることに留意する。
 - ・ 「空気が汚れている」「臭いがする」などの一般的な受け止め方を大事にする。
 - ・ 基準値（環境基準など）の意味を説明する。
- 資料作成時の留意点
 - ・ できるだけ絵や図で表現する。
 - ・ 濃度などのデータを示すときは、周辺地域のデータを引用する。
 - ・ できるだけリスクに関する情報を盛り込む。（特に基準値のある物質について）

成果

- モデルリスクコミュニケーションが、事業者による自主的なリスクコミュニケーションを促進するために、情報発信をする。